

平成19年5月の解説（府県天気予報）

【5月の天候状況】

月半ばまでは、北日本では低気圧が頻繁に通過して曇りや雨の日が多く、そのほかの地方では低気圧と高気圧が交互に通過して天気が数日周期で変化しました。中旬の後半は全国的に低気圧や前線の影響で雨や曇りの日が続きました。下旬はほぼ全国的に低気圧と高気圧が交互に通過して天気が数日周期で変化しましたが、南西諸島では前線や低気圧の影響を受けて曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間は北日本で平年より少なく、その他の地方では平年より多くなりました。降水量は北日本と東日本の太平洋側で平年より多く、西日本の日本海側と南西諸島では平年より少なくなりました。気温は東日本と西日本では高く、北日本と南西諸島では平年並でした。

【5月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報で86%、明後日予報で82%と、ともに例年^(注)より2ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は中国地方で例年より6ポイント低く、北海道、関東甲信、沖縄地方では4から8ポイント高くなりました。明後日予報は東北地方で5ポイント、近畿地方で6ポイントそれぞれ例年より低く、関東甲信、北陸、沖縄地方では例年より5から12ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差はほぼ全国的に例年を下回り、特に関東甲信、北陸、中国地方では例年より0.5から0.6小さく、全国平均では例年より0.3小さい1.8でした。また、最低気温の予報誤差は東北、北陸、九州南部地方で例年より0.3から0.5小さく、全国平均では例年より0.1小さい1.4でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【5月の天気予報から】

5月1日から2日にかけて日本付近を低気圧と前線が通過して（図1）全国の広い範囲で雨が降りました。東京地方では1日昼頃から夕方にかけてと、夜遅くから翌2日の明け方にかけての2度雨が降りました。

2日の東京地方の天気を4月30日17時発表の明後日予報では「くもり一時雨」と予報しました。これは前線の通過を1日夜遅くから2日の明け方にかけてと予想し、2日も雨が降る可能性が大きいと判断したためです。一方、5月1日17時発表の明日予報では「晴れ時々くもり」と予報しました。降水の時間帯をよりきめ細かく検討した結果、1日の夜21時前後の数時間に雨が降り、2日になってから雨が降る可能性は少ないと判断したためです。

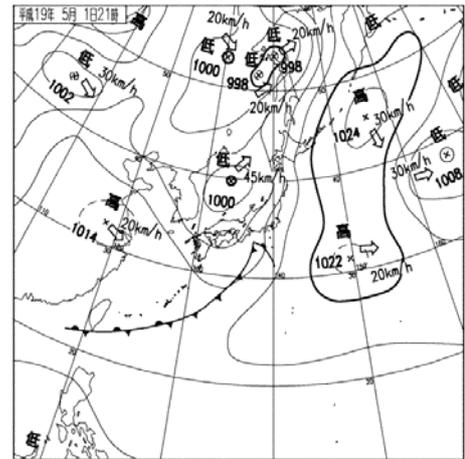


図1 2007年5月1日21時の地上天気図

実際には1日の予想より数時間遅い21時頃から雨が降り出して翌朝5時頃まで続き、2日になってから東京地方の80%の観測点で1mm以上の降水を観測しました。

週間天気予報や明後日の天気予報ではおおよその1日の天気を予報しています。一方、明日の天気予報では天気変化をよりきめ細かく予報しています。一般的に天気予報の精度は明後日予報より明日予報の方が良いと言えます。しかし、降水の時間帯を細かく限定して予報することは難しいため、日付の変わる24時頃の時間帯に雨が降る場合に予想がわずかにずれると、この事例のように「雨が降るか降らないか」という点で明日予報より明後日予報の方が適切であったというようなことが起こります。

【7月の天気予報の利用にあたって】

7月は梅雨の後半にあたり大雨による災害が発生し易い時期です。とりわけ梅雨前線に台風の影響が重なると大雨が発生し易くなります。台風の向かう方向に梅雨前線が停滞していると、台風が遠く離れている頃から梅雨前線の活動が活発になって大雨が降ることがあります。また、その後の台風の接近による影響が重なると雨が長時間にわたって降り続き大雨による被害をさらに大きくします。梅雨時期に台風が近づく予報が出ている場合には、台風が離れていても警報、注意報や天気予報などの気象情報に気を配りましょう。